

聖 書：ルカの福音書 1：46～55

説教題：マリアの賛歌

日 時：2025年12月21日（朝拝）

今日は「マリアの賛歌」として親しまれているこの箇所からクリスマスのメッセージに耳を傾けたいと思います。このマリアとはイエス様の母マリアのことです。少し前の1章26～38節には「受胎告知」の場面が記されています。マリアはガリラヤのナザレという町に住む一人の処女で、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけでした。二人は婚約関係にありました。そんな時に御使いガブリエルが神から遣わされて「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます」と告げます。マリアはこの挨拶にひどく戸惑いますが、御使いとのやり取りの中で、自分が聖霊によって神の子を宿すことを告げられます。マリアは「私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように」と応答し、御使いが示した親類エリサベツのところへと出かけます。エリサベツは老齢にもかかわらず、イエス様の先駆者となるバプテスマのヨハネを奇跡的に宿した人です。彼女は聖霊に満たされてマリアを祝福します。さらに彼女の胎内にいたバプテスマのヨハネも喜び踊ったと言われます。エリサベツは「主によって語られたことは必ず実現すると信じた人は、幸いです」と語ります。この祝福を受けてマリアが歌った歌が「マリアの賛歌」と呼ばれるものです。

マリアはまずこう言います。「私のたましいは主をあがめ、私の靈は私の救い主である神をたたえます。」 この歌は「マニフィカト」（あるいは「マグニフィカート」）と呼ばれますが、それは出だしの「あがめる」という言葉のラテン語に由来します。ではマリアはなぜ主をあがめるのでしょうか。その理由が次に書かれています。「この卑しいはしために目を留めてくださったからです。」 ここは直訳すれば「このはしための卑しさに目を留めた」となります。強調されているのは「卑しさ」です。この言葉で特に考えられているのは彼女が置かれた社会的地位や身分の低さだと思われます。マリアはガリラヤのナザレという小さく貧しい村に住む無名の少女に過ぎません。周囲から注目されず、むしろ社会的には軽んじられる存在でした。そんなマリアに神は目を留め、信じられないような光栄を与えてくださったのです。

49節では「力ある方が、私に大きなことをしてくださったからです」と歌われてい

ます。全能の神が偉大な力を発揮して、このことをしてくださいました。また「その御名は聖なるもの」とあります。ここで言う「聖なる」とは、神が被造物と区別されるお方であることを示しています。神は創造者であり、主権者であり、この世界を支配される方です。その偉大なお方が私に大きなことをしてくださいました。その結果、マリアは「今から後、どの時代の人々も私を幸いな者と呼ぶでしょう」と歌うのです。

しかし彼女は単に自分の幸いを喜んでいるわけではありません。彼女は 50 節以降で、今回の出来事を、この世界における神の働きと結び付けて歌っています。50 節で彼女は「主のあわれみは、代々にわたって主を恐れる者に及びます」と言います。つまりマリアに起こった出来事は単に個人的な出来事ではないということです。神がこの世界でこれからどのように働くか、どのように導いて行かれるか、そのことを示す前触れであり、その決定的出来事であるということです。

そして注目すべきは 51 節以降の動詞はすべてギリシャ語の過去形で書かれていることです。その部分をどう解釈したら良いでしょうか。一つの可能性は、マリアはそこで過去になされた神のみわざを振り返っているのだという理解です。だから過去形を用いていると。しかしそれ適切だと思われるのには、これは「預言的過去」と呼ばれる表現であるということです。将来必ず起こることを、あたかもすでに起こったかのように語る手法です。マリアに神が行われたこの偉大な出来事はそれほど将来に対して確実で決定的な意味を持つということです。

では、その過去形が用いられている 51 節以降で書かれていることは何でしょうか。それは一言で言えば「終末的大逆転」です。二つのことが言われています。まずその一つは「低い者が高く引き上げられる」ことです。これはまさにマリアに起こったことです。神は卑しいはしためのマリアに目を留め、「今から後、どの時代の人々も私を幸いな者と呼ぶでしょう」と言うほどのことをしてくださいました。そして彼女は 52 節で「低い者を高く引き上げられました」、53 節で「飢えた者を良いもので満ち足らせました」と述べています。ここでの「低い者」とは様々な意味で低い人を考えて良いと思います。社会的地位や能力、また外見などの点で軽んじられる人々を指します。一方の「飢えた者」とは、文字通り食べ物に事欠く人や、経済的・生活的に困窮している人々です。これらの人々が高く引き上げられ、満たされることが、マリアの出来事を通して保証されているのです。たとえすぐにそのようにならなくても、神は確実

にそのように導いてくださるので、預言的な過去形で表現されているのです。

もう一つは今の逆で、「高ぶる者が低められる」ということです。まず51節に「心の思いの高ぶる者を追い散らされました」とあります。これは自分の知識や能力、地位などを誇り、他者を顧みず、自分を優位に置く人を指します。また52節では「権力のある者を王位から引き降ろし」、53節には「富む者を何も持たせずに追い返されました」とあり、社会的・経済的に高い立場にある者が、神の基準によって引き下ろされることが示されています。このようにマリアの賛歌は単なる個人的な喜びの歌ではなく、神の世界における公平と大逆転の福音を伝えています。低い者が引き上げられ、高ぶる者が低められる——この終末的大逆転が確実に起こると言われています。

しかし、なぜこのような大逆転が起こるのでしょうか。なぜマリアの胎に神の子・救い主が宿ったことが、将来のこのような大逆転につながるのでしょうか。それはこの出来事の内に神がどのようなお方であるのか、そのご性質がはっきりと示されているからです。そして世界のすべては、この神の基準によってさばかれるからです。マリアは49節で、主なる神について「力ある方」と言いました。神は本当に力ある方、強い方です。また「その御名は聖なるもの」と言いました。神は私たちとは全く区別される創造者、支配者、主権者であられる方です。しかし、この偉大なお方はどのように行動されたでしょうか。神はご自身の尊い御子を卑しいはしためのマリアに宿されました。マリアに特別な優れた点があったからではありません。それは50節で述べられた通り、ただ主の「あわれみ」によることです。ここに神の志向性——神がどこを向いておられる方であるか——が示されています。一言で言えば神は弱者の立場に立つお方であるということです。力ある聖なる神は、その力をあわれみのために用いられます。弱い者、貧しい者、卑しい者を憐れんで救うために、ご自身を低くし、仕えてくださるお方です。

この神のへりくだりは御子をマリアの胎に宿らせることにとどまりません。マリアは自分の卑しい身に目を留めてくださった主のみわざを見て賛美しています。しかし神はさらに先へと進れます。弱い立場にある者を顧み、ご自分を結び付け、仕えてくださる神は、その極みまで進れます。それが十字架の死です。神の御子のマリアの胎への宿りは後の十字架と一本につながっています。このマリアの胎への宿りが行き着く先に、あの十字架があります。

こうして神が示されたあわれみとへりくだりの前で人の心の高ぶりは許されません。人は神のかたちに造られた存在であり、神が造られたこの世界で、神に傲い、神を映し出すように生きるべきものです。神があわれみに満ちてへりくだつておられるのに、その御前で高ぶることはできません。その人は 51 節にある通り、追い散らされます。また権力ある者も同様です。権力や富それ自体はもちろん悪ではありません。私たちは、ある地位や、富を与えてくださった神に感謝し、その神を映し出すようにそれらを用いて仕える歩みへと進むべきです。しかし、それを自己目的のために使い、弱い者を顧みなければ、必ず引き下ろされ、また富も剥ぎ取られます。この福音書の 12 章に記されている「金持ち農夫のたとえ」、16 章に記されている「金持ちと貧乏人ラザロのたとえ」が示している通りです。確かに終末的大逆転が起こるのです。

一方で、低い者や飢えた者にとってこれはグッドニュースです。力ある聖なる神は、ご自身が憐れみの神であることを示しておられます。弱い者を見捨てられません。ただし私たちには神が差し出しておられる救いを感謝して受け取ることが求められます。50 節に「主のあわれみは、代々にわたって主を恐れる者に及びます」とありました。つまり低い立場にあれば、それで全員が自動的に救われるわけではないのです。ふさわしい畏敬をもって主を恐れ、感謝と従順の心をもって神に向かう者が、このあわれみに実際にあずかります。その人が恵みによって高く引き上げられるのです。

最後の 54~55 節でマリアは、主がアブラハムとその子孫に対する約束に忠実であることを賛美しています。「主はあれみを忘れずに」とあるのは、一見そのように見える時もあったことを示しているのでしょう。しかし、マリアの胎へのキリストの受胎において、神はアブラハムへの契約を決して忘れず、その約束に真実であられることがはっきり示されました。これを見てマリアは賛美をしています。そしてこれからも主はその約束を最後まで、その完成まで導かれることを確信し、賛美をささげています。

クリスマスは大逆転という衝撃的なメッセージを私たちに示しています。現状の価値観や体制をひっくり返す革命的なメッセージを含んでいます。もしこのメッセージを無視し、高ぶって生きるなら、その人は追い散らされ、引き下ろされ、何も持たずに追い返されるでしょう。だからこそ、ここに示された神のお姿を良く見つめ、心に

刻むことが求められます。

力ある聖なる神は、御子をマリアの胎に宿らせることで、あわれみの神であることを示されました。そして御子はさらに十字架にまでも進み、私たちのために仕えてくださいました。どんなに低い者、卑しい者、愚かな者でも、この神の恵みによって救われます。このみわざを感謝し、主を畏れ敬い、マリアとともにこの賛歌を歌って主を賛美し、礼拝したいと思います。また主を恐れるとは、神に感謝し、神に従う生活へと進むことです。私たちもそれぞれの置かれたところで神を映し出す歩みをして行きたいと思います。与えられている働きや、地位や、富を、高ぶらず、神を映し出すように用いることが求められます。そうしてクリスマスの主の恵みに応答し、感謝を表し、主に喜ばれ、高く引き上げられる幸いに導かれる者でありたいと願います。